埼玉純真短期大学研究論文集　第９号　PP.47-53

幼稚園における「気になる子」に関する研究
―　実習生が認識した子どもの特徴と保育者の対応に着目して　―

Study on the "child of concern" in the preschools.
― By focusing on the correspondence of the preschool teachers
and the features of the children student teachers ―

金　子　功　一
（非常勤講師）

持　田　京　子
（専任講師）

金　子　智　昭
（慶應義塾大学大学院　社会学研究科）

要旨　本研究は，本学の２年生34人を対象に，幼稚園教育実習で出会った「気になる子」の特徴とその子どもに対する保育者の対応を調査することを目的とした。実習生が認識した「気になる子」は，63人【男児：47人（75%），女児：16人（25%）】で，年齢の内訳は３歳（16人：25%），４歳（24人：38%），５歳（23人：37%）であった。また，「気になる子」の行動特徴は特に，【落ち着きのなさ】に関する記述が多く見いだされた。さらに，「気になる子」に対して保育者は，【個別の関わり・声かけ（59%）】及び【保育環境の工夫（17%）】等によって対応（支援）していることが明らかとなった。これらの結果から，教育実習を通して実習生は「気になる子」の行動特徴を把握し，保育者の対応も理解し学んでいることが示された。

【キーワード：幼稚園　教育実習　気になる子　行動特徴　保育者の対応】

Ⅰ　はじめに

近年，特別支援教育の進展に伴い，幼稚園に特別支援教育コーディネーターが指名されるなど（文部科学省，2015）[1)]，支援体制が整備されている。また，幼稚園教育要領（文部科学省，2008）[2)]には，「特別支援学校などの助言又は援助を活用すること」も明記されている。こうした状況の中では，相談担当者や研究者等は特定の何らかの診断名がついている対象児を中心に保育者と協議しながら支援方法を検討しているが，一方で保育者からも「気になる子」に関する相談を多く受けることが指摘されている（久保山ら，2009）[3)]。

保育者は保育上で何らかの課題がある幼児のことを「気になる子」や「気になる子ども」という言葉で表現する。こうした言葉は定義が曖昧なまま使用されていることが多く，「気になる子」という言葉が示す子どもの姿は保育者間で異なると考えられる。久保山ら（2009）[3)]は，「気になる子ども」についての保育者の意識と対応に関する調査を行っている。「あなたにとって『気になる子ども』はどのような子どもですか」という設問に対して552人の自由記述を整理したところ，①発達上の問題，②コミュニケーション，③落ち着きがない，④乱暴，⑤情緒面での問題，⑥しようとしない（例:無気力，表情が乏しい，友だちの輪に入れない），⑦集団への参加，⑧その他に分類している。

また，「気になる子どもがいる場合，どのようなことが保育上課題になっていますか？」という設問に対して511人の自由記述を整理したところ，「行動上の課題（23%）」と「集団での活動における課題（20%）」が40%以上を占め，次に「他児との関係（14%）」，「コミュニケーション（13%）」，「心理的安定（12%）」を挙げていた。さらに，本郷ら（2003）[4)]は，「気になる子ども」の特徴について，「落ち着きのなさ」「状況への順応性の低さ」「ルール違反」は比較的早い時期から問題となりやすいが，年齢を重ねるにつれて「対人的トラブル」が次第に大きな問題になると述べている。このように保育者が「気になる子」という言葉から想定される子どもの実態は多様であり，発達段階を考慮した上で子どもに対応することが重要である。

上記の先行研究による分類は，実際の幼稚園や

保育所における現職の保育者が捉えた子どもの実態と保育上の課題である。吉村（1999）[5] は，幼児の行動傾向に対する保育者の理解及び対応の方法は，保育者の経験年数も要因として影響することを示唆している。また，保育者の保育行動の経験的な向上を検討するためには，将来保育者になることを目指す実習生の「幼児理解」と「関わり」について考慮する必要性を論じている（吉村，1999）[5]。そこで本研究では，現職の保育者ではなく実習生を対象として，教育実習を通して実習生が認識した「気になる子」の特徴とその子どもの行動特徴，及び現職の保育者がどのような対応をしていたかについて調査することを目的とする。

なお，郷間（2005）[6] は，診断を受けていない保育上の困難を有する「気になる子」が全幼児の13.34%おり，男児のうち21.04%，女児のうち5.58%を占めていることを指摘し，「気になる子」に関しては女児より男児が多いことを明らかにしている。そのため本研究では，性差がみられるかどうかについても検討する。

Ⅱ　方 法

対象　本学の34名（2年次の幼稚園教育実習Ⅱの履修者のうち1クラス分）を対象とした。全員が幼稚園教諭2種免許状と保育士資格の取得を希望している。

実習状況　本学においては1年次9月から10月に幼稚園教育実習Ⅰ（1週間），2月から3月に施設実習（12日間），2年次5月から6月に幼稚園教育実習Ⅱ（3週間），7月から8月に保育所実習Ⅰ（11日間），9月から10月に保育所実習Ⅱ（11日間）を行う。

調査時期及び倫理的配慮　本調査は2015年，幼稚園教育実習Ⅱ（3週間）後の7月下旬に実施され，学生はその後，保育所実習Ⅰを行った。調査は，「幼児教育方法論」（前期・必修，配当年次2年）における授業の一貫として，調査用紙を配布し，約20分程度の時間を利用して行われた。なお，無記名回答とすることにより，個人の匿名性は守られることを口頭で説明した。

調査内容　幼稚園教育実習Ⅱの前に，「気になる子」に関する調査をする旨を伝え，実習終了後に実習中の「気になる子」について質問されることを意識させた。本研究では，幼稚園実習で出会った「気になる子」について，『障がいがあるために“気になる子”や障がいがあるというわけではないけれども，なんとなく“気になる子”』と定義することとした。

調査内容は，以下の1.から4.ように設定し，回答させた。

1. 実習を通して「気になる子」に出会ったかどうかに関して“はい”“いいえ”で回答する。
2. 各学生の実習先における「気になる子」の人数と性別を記述する。
3. 「気になる子」の行動特徴がどのような領域で気になったか一つを選択する。「気になる子」の行動特徴については，本郷ら（2003）[4] を参考に，①順応性の低さ（例：一度主張すると自分の考えを変えないなど），②落ち着きのなさ（例：じっと椅子に座っていられないなど），③衝動性（例：周りの子どもにつられて，騒いでしまうなど），④ルール違反（例：他児とともに一定時間待っていることができないなど），⑤対人的トラブル（例：他児の行為に対して怒るなど），⑥その他（できるだけ特徴を記述）の選択肢を作成し，回答させた。
4. 「気になる子」に対して保育者がどのように対応していたかに関して具体的に記述させた。保育者の対応については，久保山ら（2009）[3] を参考に，1）個別の関わり・声かけ，2）保育上の工夫，3）けじめ・注意，4）友だちづくり・関係調整，5）活動の設定，6）人員の配置・協力体制，7）その他，の7カテゴリーに分類した。ただし，2）保育上の工夫は，他の6カテゴリーと重複する用語の内容であるため，本研究では「保育環境の工夫」という用語を用いて分類することとした。

他の調査内容　2年次の幼稚園教育実習における「気になる子」については，実習生自身が実習を通して経験した「気になる子」への“対応の難しさ”や，実習前よりも実習を通して“子どもへの理解”が進んだかに関する回答を求めたが，紙面の都合から後日報告することにした（資料を参照）。

Ⅲ　結果と考察

1.「気になる子」の人数と性差

実習を通して「気になる子」に出会ったかどうかに関して33人（98%）の学生が“はい”と回答

した（表1）。実習生が認識した「気になる子」は63人【男児：47人（75%），女児：16人（25%)】で，年齢の内訳は3歳（16人:25%），4歳（24人:38%），5歳（23人：37%）であった（表2)。「気になる子」において女児よりも男児に多く確認されたことは，先行研究（郷間ら，2008；今中ら，2013）[6) 7)] と一致する。

表1　幼稚園教育実習で出会った“気になる子”の有無

はい	33（ 98%）
いいえ	1（　2%）
全自由記述数	34（100%）

表2 “気になる子”の性別と年齢

性別	全体の人数 63人（100%）	3歳 16人（25%）	4歳 24人（38%）	5歳 23人（37%）
男児	47人（ 75%）	11人（18%）	17人（27%）	15人（24%）
女児	16人（ 25%）	5人（ 9%）	7人（11%）	7人（11%）

2.「気になる子」の行動特徴と年齢差

実習生が認識した「気になる子」の行動特徴の頻度と各年齢における割合を男児は表3，女児は表4に示す。表3より男児は「②落ち着きのなさ」【3歳（8人：45%），4歳（6人：24%），5歳（5人：22%)】，「⑥その他」【3歳（3人:16%），4歳（8人:32%），5歳（7人：31%)】で多く，表4より女児においても「②落ち着きのなさ」【3歳（2人:50%），5歳（1人:17%)】，「⑥その他」【4歳（2人:50%），5歳（4人:66%)】に関する記述があった。男児女児共に，「②落ち着きのなさ」「⑥その他」における行動特徴が目立った。表5より，「⑥その他」の記述数は全部で21（100％）あり，行動の遅れ9（42%），何らかの障がいをもつ子4（18%）が特に示された。

こうした結果が見いだされた理由について，実習生が「気になる子」の行動特徴を分類できていない可能性が推測される。

表3 “気になる子”の行動特徴と年齢との関連（男児）

行動特徴	3歳	4歳	5歳
①順応性の低さ	2人（ 11%）	3人（ 12%）	3人（ 14%）
②落ち着きのなさ	8人（ 45%）	6人（ 24%）	5人（ 22%）
③衝動性	2人（ 11%）	4人（ 16%）	1人（　5%）
④ルール違反	2人（ 11%）	4人（ 16%）	3人（ 14%）
⑤対人的トラブル	1人（　6%）	0人（　0%）	3人（ 14%）
⑥その他	3人（ 16%）	8人（ 32%）	7人（ 31%）
全自由記述数	18人（100%）	25人（100%）	22人（100%）

表4 “気になる子”の行動特徴と年齢との関連（女児）

行動特徴	3歳	4歳	5歳
①順応性の低さ	0人（　0%）	1人（ 25%）	0人（　0%）
②落ち着きのなさ	2人（ 50%）	0人（　0%）	1人（ 17%）
③衝動性	1人（ 25%）	0人（　0%）	1人（ 17%）
④ルール違反	1人（ 25%）	0人（　0%）	0人（　0%）
⑤対人的トラブル	0人（　0%）	1人（ 25%）	0人（　0%）
⑥その他	0人（　0%）	2人（ 50%）	4人（ 66%）
全自由記述数	4人（100%）	4人（100%）	6人（100%）

表5 「⑥その他」における記述内容の内訳

1. 行動の遅れ	9人（ 42%）
2. 何らかの障がいをもつ子に関する記述	4人（ 18%）
3. 言葉の遅れ	2人（ 10%）
4. 分離不安	2人（ 10%）
5. 過敏性	2人（ 10%）
6. 外国籍の子，他園からの転入	2人（ 10%）
全自由記述数	21人（100%）

3.「気になる子」への保育者の対応

実習生が認識した「気になる子」への保育者の対応における記述数を表6に示す。表6より保育者の対応における記述数は全86（100%）あり，その内訳は，1）個別の関わり・声かけ51（59%），2）保育環境の工夫14（17%），3）けじめ・注意10（12%），4）友だちづくり・関係調整4（6%），5）人員の配置・協力体制3（4%），6）活動の設定2（2%），7）その他2（2%）の順であった。このことから，保育者は「気になる子」に対して，1）個別の関わり・声かけ，2）保育環境の工夫，3）けじめ・注意，という対応を特に行っていることが示唆された。

表6 “気になる子”への保育者の対応と記述数，及び具体的な記述例

保護者の対応	記述数 86（100%）	具体的な記述例
1）個別の関わり・声かけ	51（ 59%）	一度そっとしておき，その子どもの様子をみて，落ち着いてきたときに一対一で話をしていた 声かけの工夫 (わかりやすいように間隔をあけて話す，目を見て伝える) 等
2）保育環境の工夫	14（ 17%）	言葉では伝わりにくいので，ピアノの音を片付けの合図にしていた 少し放っておいて，あまり叫ぶ時は離れた場所に連れていき落ち着かせていた 等
3）けじめ・注意	10（ 12%）	駄目なことはきちんと伝え，なぜそのようにしたのか等の理由を聞く・悪いことをしたら子どもの目をみて叱る 等
4）友だちづくり・関係調整	4（ 6%）	子どもが遊びに入るとき子ども同士の仲介になる・皆の輪に入れるように声をかける 等
5）人員の配置・協力体制	3（ 4%）	保育者同士でその子のかかわり方をどのようにしていくかについて毎日話し合っていた 等
6）活動の設定	2（ 2%）	できる限りその子のやりたいことを尊重する・自分でできるように工夫して物事を促す
7）その他	2（ 2%）	園の集まりがあるとき，その子の傍にいて，肩や背中をポンポンとしていた 等

4.「気になる子」の年齢別行動特徴と保育者の対応の関連

「気になる子」の年齢別に行動特徴×対応の頻度と％について男児は表7，女児は表8に示す。表7の男児への『1）個別の関わり・声かけ』による保育者の対応は特に，①順応性の低さ【3歳児（1：50%），4歳児（3：100%），5歳児（3：100%）】と，②落ち着きのなさ【3歳児（5：63%），4歳児（4：67%），5歳児（3：60%）】で用いられていた。同様に，表8の女児への『1）個別の関わり・声かけ』による対応は，②落ち着きのなさ【3歳児（2：100%），5歳児（1：100%）】でも用いられていた。さらに，『3）けじめ・注意』による保育者の対応では，男児の②落ち着きのなさ【3歳児（3：38%），4歳児（2：33%）】で使用頻度が多くみられた。

これらの結果から，保育者は，「①順応性の低さ」の特徴のある男児に対しては『1）個別の関わり・声かけ』，「②落ち着きのなさ」の特徴がある幼児には『1）個別の関わり・声かけ』，『3）けじめ・注意』，を用いて対応していることが示された。ただし，本研究では女児のサンプル数が少なく性差の検討が不十分である。

そのため，今後はサンプル数を増やし性差を考慮した上で，「気になる子」の行動特徴と保育者の対応との関連をより詳細に検討したいと考えている。

表7 “気になる子”の年齢別行動特徴と保育者の対応に関する記述（男児）

行動特徴	3歳	4歳	5歳
①順応性の低さ	2人 【1(1:50%),3(1:50%)】	3人 【1(3:100%),2(1:33%)】	3人 【1(3:100%),2(1:33%),3(1:33%)】
②落ち着きのなさ	8人 【1(5:63%),3(3:38%),5(1:13%),6(1:13%)】	6人 【1(4:67%),2(1:17%),3(2:33%),6(1:17%)】	5人 【1(3:60%),2(1:20%),3(1:20%),5(1:20%)】
③衝動性	2人 【1(1:50%),3(1:50%),5(1:50%)】	4人 【1(2:50%),2(2:50%)】	1人 【1(1:100%),3(1:100%)】
④ルール違反	2人 【1(1:50%),3(1:50%),5(1:50%)】	4人 【1(2:50%),2(2:50%),6(1:25%)】	3人 【1(2:67%),2(1:33%),3(2:67%),5(1:33%)】
⑤対人的トラブル	1人 【1(1:100%)】	0人	2人 【1(2:100%),2(1:50%)】

注1）【　】内の1から6の番号は，表6の保育者の対応における番号を示している（以下の1）から6）を参照)。
1）個別の関わり・声かけ，2）保育環境の工夫，3）けじめ・注意，4）友だちづくり・関係調整，5）人員の配置・協力体制，6）活動の設定
注2）【　】内にある（　）は，頻度と人数の％を表している。

表8 “気になる子”の年齢別行動特徴と保育者の対応に関する記述（女児）

行動特徴	3歳	4歳	5歳
①順応性の低さ	0人	1人 【1(1:100%),4(1:100%)】	0人
②落ち着きのなさ	2人 【1(2:100%),2(1:50%)】	2人 【3(2:100%)】	1人 【1(1:100%)】
③衝動性	1人 【1(1:100%)】	0人	1人 【1(1:100%),4(1:100%)】
④ルール違反	1人 【3(1:100%)】	0人	0人
⑤対人的トラブル	0人	1人 【2(1:100%)】	0人

注1）【　】内の1から6の番号は，表6の保育者の対応における番号を示している（以下の1）から4）を参照)。
1）個別の関わり・声かけ，2）保育環境の工夫，3）けじめ・注意，4）友だちづくり・関係調整
注2)【　】内にある（　）は，頻度と人数の％を表している。

Ⅳ　総合考察

1.「気になる子」に対する実習生の認識と実態

本研究は，現職の保育者ではなく短期大学2年次の幼稚園教育実習を経験した実習生を対象として，実習生が認識した「気になる子」の特徴及び保育者の対応について検討することを目的とした。

実習中における「気になる子」については，実習生34人中33人が認識していることが示された。これは，ほとんどの実習生が「気になる子」の存在を認識していることを示す結果である。また，本研究における「気になる子」に関する性差について，女児よりも男児に多く確認された。今中ら(2013)[7] は，保育者を対象に，就学前児の行動評価に関するSDQ（Strengths and Difficulties Questionnaire）日本語版：行為面，多動・不注意，情緒面，仲間関係，向社会性の5分野25項目からなる尺度を実施した。この尺度は，発達障がいのある子どもや発達障がいの疑いのある子どもをスクリーニングするための質問紙として活用されている。保育者の挙げた「気になる子」と性差との関連を検討した結果，仲間関係得点を除く5つの得点で認められ，各平均値は女児よりも男児の方がより困難性が示されたことを指摘している。

さらに，実習生が認識する「気になる子」の内訳をみると，各年齢段階においていずれもある程度「気になる子」が存在することが示唆された。教育実習は，実習生が配属されるクラスは限られることや実習生間の「気になる子」に対する認識に相違が見られること等を考慮する必要があると考えられるが，本研究の知見から実習生は教育実習において「気になる子」の姿を認識し記述している様子が伺われた。また先行研究（久保山ら(2009)[3]）等では，子どもの年齢が増加するにつれて「気になる子」が目立ってくるという知見が

示されている。今後は，各年齢段階でどのような違いがみられるかどうかについて検討したい。

2.「気になる子」の行動特徴と性差との関係

実習生が認識した「気になる子」の行動特徴と性差との関係では特に，3・4・5歳の各年齢段階における男児及び3歳の女児において，「②落ち着きのなさ」に関する行動特徴が比較的多くみられた。本郷（2003）[4] は，「気になる」子どもの特徴を単に子ども自身の問題とするのではなく，子どもの個体内の要因と子どもを取り巻く人との関係性の要因の両側面から捉えることの重要性を指摘している。本研究の結果及び先行研究の知見から，「気になる子」の行動特徴の原因について，子ども自身の問題として決めつけるのではなく，周囲の他児との関係性も考慮に入れた上で，適切な対応方法を検討することが必要であると考えられる。

また本研究では，「⑥その他」に関する記述数も多くみられた。これは，保育経験の少ない実習生を調査対象としたため，行動特徴をきちんと分類できなかったという可能性が推察される。したがって今後は，現職の保育者と実習生がどのような行動特徴のもとで「気になる子」を判断しているかに関する相違について調査を行いたいと考えている。

3.「気になる子」に対する保育者の対応

「気になる子」に対する保育者の対応は，「個別の関わり・声かけ」が最も多く，次に「保育環境の工夫」を用いていることが示された。一方，久保山ら（2009）[3] の調査結果では，「個別の関わり・声かけ」が最も多く，次に「けじめ・注意」に関する内容であった。このように久保山ら（2009）[3] の研究知見と異なり，本研究では「保育環境の工夫」が「けじめ・注意」の記述よりも多く見いだされた。本研究と久保山ら（2009）[3] で見いだされた記述数の差に関する詳細な理由を述べることは困難であるが，「気になる子」への直接的な支援だけではなく，その子を取り巻く環境へ働きかけるという間接的な支援も考慮する重要性が示されたと考えられる。実際，久保山ら（2009）[3] は，幼稚園や保育所への機関支援を行う者は，「気になる子」への直接的な支援だけでなく，周囲の他児も含めた環境への働きかけを行う必要があると指摘している。教育実習を通して実習生は，保育者がどのような保育環境を工夫することで「気になる子」に対応しているかについても学んでほしいと考える。

Ⅴ　今後の課題

幼稚園教育実習を通して実習生は「気になる子」の行動特徴を把握すると共に，現場の保育者の対応も学んでいることが示唆された。しかし，本研究における対象者は，2年次の幼稚園教育実習を経験した1クラス34人であった。今後は対象者を増やし，実習生が把握する「気になる子」のとらえ方を詳細に検討する必要がある。また，実習生が「気になる子」との関わりの中でどのようなことを学ぶのかについても検討したい。

Ⅵ　引用文献

1）文部科学省　平成26年度特別支援教育体制整備状況調査結果　2015，http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1356211.htm（最終アクセス日，2016/04/01）
2）文部科学省　幼稚園教育要領　2008.
3）久保山茂樹・齊藤由美子・西牧謙吾　他「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査：幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言　国立特別支援総合研究所研究紀要　2009，36，pp.55-76.
4）本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子　他　保育所における『気になる』子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究　発達障害研究　2003，25，pp.50-61.
5）吉村智恵子　幼児に対する理解と態度の関連：教育実習生の視点　名古屋女子大学紀要　1999，pp.111-120.
6）郷間英世・圓尾奈津美・宮地知美　他　幼稚園・保育園における『気になる子』に対する保育上の困難さについての調査研究　京都教育大学紀要　2008，113，pp.81-89.
7）今中博章・高橋実・伊澤幸洋　他　保育者の「気になる子」という認識と子どもの行動に関する調査　福島市立大学教育学部研究紀要　2013，1，pp.7-14.

「実習先における気になる子について」

1．実習前にお伝えした“**気になる子**”に関してお聞きします。
以下は，先日終えた幼稚園実習についてお聞きする“気になる子”の定義です。
以下の定義に基づいて回答してください。

◇**気になる子**とは，『今回の幼稚園実習で，子どもたちとのかかわりを通して，障がいがあるために“気になる子”や障がいがあるというわけではないけれども，なんとなく“**気になる子**”』とします。

（1）あなたは，幼稚園実習を通して，「気になる子」に出会いましたか？
“はい”，“いいえ”，のいずれか1つに○をつけてください。

（2）「はい」に○をつけた方にお聞きします。あなたが今回の実習で出会った「**気になる子**」は何人位いましたか？まず，どのような子どもに出会ったのかを振り返ってください。次に，それぞれの子どもの性別（1：男の子　2：女の子）と年齢を教えてください（わからなければ，不明と記す）。

（3）あなたが出会った「**気になる子**」は，どのような点で気になりましたか？
どのような領域で気になったかについて，以下に数字で記してあります。
あてはまる領域に関して，以下の数字（①～⑥）の中から一つ選んで，記してください（⑥を選択した場合は，できるだけ特徴を記してください）。

① 順応性の低さ(例:一度主張すると自分の考えを変えない，など)
② 落ち着きのなさ（例：じっと椅子に座っていられない，など）
③ 衝動性（例：周りの子どもにつられて，騒いでしまう，など）
④ ルール違反（例：他児とともに一定時間待っていることができない，など）
⑤ 対人的トラブル（例：他児の行為に対して怒る，など）
⑥ その他（※できれば特徴を記述してください）

（4）質問（3）の「**気になる子**」にあなたが対応する（かかわる）とき，どのような点に難しさを感じましたか？具体的に記述してください。

（5）質問（3）の「**気になる子**」に対して，保育者はどのような対応をしていましたか？
保育者の対応について，気づいたことや接し方を工夫していたことなどがあれば，具体的に記述してください。

2．“**子どもへの理解**”に関してお聞きします。

（1）今回の幼稚園実習を振り返って，実習前よりも“**子どもへの理解**”が進みましたか？
“はい”，“いいえ”のいずれか1つに○をつけてください。

（2）「はい」に○をつけた方にお聞きします。今回の幼稚園実習で，あなたが実習前よりも“**子どもへの理解**”が進んだと思った（感じた）のは，どのような理由からですか？
できるだけ具体的に記述してください。

◇ 今回の課題は，この授業の評価と関係しますので，質問内容をよく読んで，きちんと回答してください。ただ，もし実習先に「気になる子」がいなかった場合，無理に回答する必要はありません。

資料 「実習先における気になる子について」